良質な教員採用試験(英語専門筆記)の研究開発

—日韓英語教員採用試験に関する意識調査に基づいて—

脇田博文・松村省一

▶キーワード

Japanese secondary school English teachers
knowledge and skills required
employment examinations

Summary

This paper aims at investigating what skills and knowledge should be evaluated in the employment examinations (first-stage written tests in particular) for Japanese secondary school teachers from the perspective of selecting quality teachers. To this end, an exploratory questionnaire was administered to 130 current Japanese secondary school English teachers who were asked to evaluate the Japanese and Korean employment examinations.

Participants compared the English Teacher Employment Exams of both countries, noted what teaching knowledge and skills were emphasized, and commented on the gap between teacher qualities assessed in the exams and qualities needed in real-life classroom situations. They were also asked to comment on what skills and knowledge are required in teaching English and how to improve the Japanese exams and the present English teaching curriculum in universities.

Interpretation of the Japanese teachers' evaluation of the two tests and their comments suggest that it is important to assess practical situated knowledge and skills in particular, and thus on the Japanese test, a big gap exists between examinations and classroom reality. In conclusion, other findings of skills and knowledge identified are also discussed and ways to improve the employment examinations are suggested.

1　研究の目的

本研究は良質な教員採用試験（英語専門筆記）［以下、英語専門筆記試験とする］の研究開

発とその波及効果の検証を最終の目的とする。この一環としてこれまで、英語教育を取り巻く環境や教員採用制度などにおいて非常に近い位置にある韓国との比較に立って、日本の英語専門筆記試験の有効性・妥当性について調査研究を行ってきた[1)]。その過程で、そもそも英語専門筆記試験で測るべき能力とは何か、敷衍すれば、優秀な英語教員に求められる能力とは何かという問題に帰着し、この本質的な問題を解決せずには良質な英語専門筆記試験の開発は不可能であると考えるに至った。

本稿では、日本の中高英語教員を対象に実施した日本と韓国の英語専門筆記試験に関する意識調査に基づいて、まず優秀な英語教員に求められる能力とは何かを検討し、併せて第一関門として実施される英語専門筆記試験[2)]が教員採用試験全体の中でどのように位置付けられるべきか提言を行うこととする。

2　研究の背景と意義

近年、グローバル化の急速な進展に伴い、国家的な戦略構想の一環として英語コミュニケーション能力の育成が強く要請されている。韓国や台湾などの近隣東アジア諸国、さらにはEU諸国の最近の外国語教育政策の動向を見る限り、日本はむしろ後塵を拝している状況にあると言ってよい。

日本では、日本人に求められる英語力に関する提言[3)]を受けて、「英語が使える日本人」の育成のための戦略構想（2002年７月）及び行動計画（2003年３月）が打ち出されたことは周知のとおりである。そこでは中高の英語授業の改善のための具体的方策とともに、英語教員に求められる英語力としてTOEFL・TOEIC等による目標数値の設定、５か年英語教員悉皆集中研修、ALTの活用促進、雇用形態の改善などが示された。このように、英語教員にはますます高い英語力・専門的指導力が求められる方向にある。

だが、そもそも英語教員に求められる英語力あるいは専門的能力とは何かということについて踏み込んだ議論はほとんどなされていない。それゆえに一定の共通認識もほとんどない。この実情は、各都道府県（市）教員採用試験や大学英語教員養成プログラムにも反映されている。近年の情報公開の流れから、ようやく全国都道府県（市）教育委員会の英語専門筆記試験の内容が明らかになってきた。しかし試験内容・形式・時間などは多種多様で、決して一定のガイドラインがあるわけではない。また大学英語教員養成プログラムを見ても、「教科に関する科目」では、英語学、英米文学、英語コミュニケーション、異文化理解の４つのカテゴリーにおいて最低１単位以上、合計32単位以上を充たしていれば、具体的な科目設定は各大学にまかせられている。したがって、教職科目である「英語科教育法」を除いて、各大学の英語教員養成プログラムは千差万別であると言える[4)]。

ところで、今後の教員養成・採用を取り巻く社会的政治的な背景に目を向けると、決して楽観できない状況がある。まず、ゆとり教育の影響や大学全入時代を迎えて大学生そのものの学力が低下すると考えられ、これは英語教員を目指す学生も例外ではない。また、団塊世代の大量退職を受けて教員需要が急速に増えている。これに加えて、小学校英語教育が2010年度から必修教科として本格的に実施されると、英語教員の需要に一層拍車がかかると予想される。そうすれば英語教員全体の質的低下は免れえず、何らかの対策を早急に講じる必要がある。

このような文脈の中で、優秀な英語教員を確保するためには、養成・採用・研修各段階の並行的かつ一貫性のある充実を図ることが喫緊の課題となる。その中でも、特に教員採用試験は教壇に立つ者を選定する手段であり、その妥当性・有効性の検証は不可欠である。さらに、それは教員志望者の試験準備や教員養成課程の内容にも何らかの波及効果を及ぼす意味からも、その改善は重要な意味を持つ。

この点に関して、教育職員養成審議会第3次答申（1999年12月）も、多様な力量を持った人材の確保のために、選考方法の多様化、選考尺度の多元化を図ることを明示する[5]と同時に、教員採用に関わる学力試験そのものについても、教員の一定の水準を担保する観点から良質な学力試験問題の研究開発を行うことを強く求めている。

英語専門筆記試験は採用への第一関門であり、たとえ優れた英語口頭運用能力を持っていたとしても、一定の得点を取らなければ2次試験に進めないのは事実である。それゆえに、多くの受験者をふるいにかける英語専門筆記試験に有効性や妥当性が十分に備わっているのか、教員採用試験全体の中でいかに活用されるべきかという問題を明らかにすることは意義がある。

3　先行研究

日本の教員採用試験に関しては、情報公開の流れから具体的な試験内容が明らかになったのはごく最近である。したがってこの分野の研究はまだ緒についたばかりで特筆すべき研究はまだない。だが、大学英語教育学会（JACET）では、中高英語教員の指導力向上を図る意味から、教員採用試験や大学英語教員養成プログラムのあり方について関心が徐々に出始めている（大井・笹島 2004；伊藤・神保 2004；笹島・大井・古家貴雄・清水公男 2005；JACET教育問題研究会 2006）。

この中でも特に、JACET全国大会シンポジウムで行った「英語教員採用試験の現状と現場で求められる力」と題する清水（2005）の発表は注目に値する。清水によれば、東京都公立学校の新規英語教員採用者は、採用試験で何を評価されたかという問いに対して、1次英語専門筆記試験では語学力のみ、2次試験では専門性、社会性、人間性が評価されていると回答し、「ほぼ全員が試験全体の妥当性・評価基準に疑問を抱いている」。さらに、清水は、採用試験の採用基準設定は難しく、共通理解もなく、時代や場所や視点（立場）によって求めているものが異なることを指摘した上で、良質な学力試験の研究開発するために大学や教育委員会などが共同・連携して、英語教員に求められる資質・能力を適切かつ有効に測る方法の研究開発を行う重要性を主張している。

JACET教育問題研究会（2006）は、「英語科教職課程における英語教授力養成に関する実証的研究」のまとめの中で、英語教員として養成すべき能力について次のような提言をしている。まず、英語力、つまり英語口頭運用能力と英語読解・文法力の養成、そして「教科に関する科目」では授業力の養成を優先事項として、英語の技能別指導技術を養成する科目を設置すること、そして教材論、評価論、マルチ・メディア教授法などの科目は実践的内容とするといった点である。この研究は英語教育関係者が漠然と意識していることを包括的な研究調査によって明らかにし、大学英語教員養成プログラムの再考を促し、改善の方向性を示した点は高く評価できる。

以上が日本に関する研究事情である。だが、これらはいずれも教員採用試験システムを包括的に検討することによって、授業力や実践力を教員採用試験でいかに測るべきかが今後の課題であること指摘するにとどまり、英語専門筆記試験の妥当性の検証や波及効果について論じる所まで至っていない。

ちなみに、韓国の教員養成・採用に関する研究に目を向けても、比較教育学・英語教育政策の観点に基づく若干の研究（Kim・Han 2002；河合2004；Fouser 2004；佐野2005）があるが、同様に、それ以上踏み込んだ研究はない。

4　日韓英語教員採用試験の比較

日韓の英語専門筆記試験に関する分析・考察を行うに先だって、両国の教員採用試験の概要について若干触れておく必要があるだろう。なぜなら、日本と韓国では教員採用試験は優秀な教員を担保するために重要な役割を果たしており、また総体的に似通った採用システムを取りながらも、システムや試験を詳細に比較すると顕著な違いが見られるからである。

(1)　採用制度・選考試験

日韓の教員の採用と選考は公開任用試験として２段階選抜で実施される。日本の場合は、全国60都道府県（市）教育委員会それぞれが、７～８月にかけて教職・専門などの筆記試験や面接試験、実技試験、作文・論文試験、模擬授業・指導案の作成、場面指導、適性検査などの多様な選考方法を組み合わせて実施する。特に近年は、文部科学省の指針を受けて、教員としてふさわしい資質能力を備えた人材の確保のために選考方法の多様化・選考尺度の多元化が進んできているが、基本的な採用・選考の仕組みは変わっていない。１次試験は筆記試験（教職教養、一般教養、専門試験）、小論文、面接などで構成され、これを合格した者が英語面接、集団面接・討論、模擬授業、小論文などの２次試験を受けることになる。教員採用試験の内容は、近年の情報公開の流れからようやく明らかになってきたが、選考基準の詳細は公開されていない。

韓国の場合は、全国16のソウル市及び道教育委員会による公開試験に基づく。試験は、明確な国のガイドラインに則って公正かつ厳格な統一システムとして機能することが求められている。まず、１次試験は、その年度の採用教員数を11月に確定した後、初等学校の場合は11月末頃、中等学校の場合は12月上旬に実施される。この１次試験は筆記試験であり、韓国教育課程評価院（KICE:Korean Institute of Curriculum and Evaluation）が試験問題を作成･採点し、各市･道教育庁が実施する。問題の種類はソウル・仁川型と全国型の２種類があるが、内容・形式にはほとんど違いがない。2005年度の試験内容及び配点は、教育学（教職関連科目）20%【選択型問題】、専門科目80%【叙述･論述型】、合計100点となっている。これに大学在学成績が20点、その他加算点10点が一次試験の点数に加わり、１次試験の合計点数は130点となる。１次試験合格者は成績順に決定され、採用枠の130%の人数がここで確保される。続く２次試験は２月初旬に実施され、①論文（普通1000～1200字を50～90分内で作成）、②面接（教員として適性、教職観、人格、素養及び専門性などを英語で評価、Native Speakerによる英語ヒアリング及び

会話能力の評価)、③模擬授業などの実技評価（学習指導案の作成と模擬授業）など50～60点分が課せられる。最終合格者の決定は１次・２次試験を合算して、高得点順に30％を脱落させて採用定員を最終的に確保する。有効期間は２年間である。

(2) 英語専門筆記試験の特徴

日韓の英語専門筆記試験は形式・内容などにおいて大きく異なる。特に、韓国の試験形式がnorm-referenced test（集団基準準拠テスト）であるのに対して、日本の場合はcriterion-referenced test（目標基準準拠テスト）をとっている点は最も大きな違いである。つまり、韓国の試験が目標に定められた特定の言語項目がどれほど達成されたかを絶対数値として調べるものであるが、日本の試験は総合的な言語能力に関して全体の中での相対的な位置を調べるという性格を持つ。

韓国の試験を見ると内容、配点、試験時間などにおいて明確な国のガイドラインが示され、厳格に統一されている。試験時間は150分、問題数は20問程度、配点は80点で、教職関連科目の配点が20点であるのに比べるとかなり専門科目が重視されている。２種類の問題はほとんどすべてが記述式解答であり、しかも80％が英語で解答することが求められる。内容についてもガイドラインが設定されていて、2004年度においては教科教育学20～30％（英語教育学25％)、教科内容学70～80％（一般英語40％、英語学20％、英文学15％）という割合である。さらに詳細に見れば、英語教育関連では言語習得論、教授法、４技能の指導法、テスト・評価など、また英語学関連では音声学、形態論、統語論、語用論、意味論、学校文法、英語史など幅広い知識が要求され、英語専門筆記試験の準備にはかなり専門的かつ系統的な勉強が必要となる。

これに対して、日本の場合は、総合的な観点から資質能力を評価する傾向が強いので、韓国ほど厳格な選考基準を持たず、また専門科目（英語）の配点比重も韓国ほど重くないと考えられる[6]。試験内容は、概ね文法・語彙、長文総合問題、英訳・和訳、教育課程、授業案作成などで構成されているが、各都道府県によってさまざまである。また韓国とは違って、伝統的な日本の大学入試を反映してか、英文読解が中心で（Oi & Sasajima 2004)、ほとんどの問題が多肢選択か日本語による解答である。

5　調査計画の概要

本調査の概要は以下のとおりである。

(1) 調査時期：2005年９月～12月

(2) 調査対象：京阪神地区で教壇に立つ中高英語教員130名、有効回答は89名（回収率68％)。回答者の内訳は中学校教員24名、高校教員65名、年齢は20～50代と幅広い。

(3) 調査方法：郵送による質問紙法。日韓の英語専門筆記試験問題[7]を解いてアンケート調査（Appendix１参照）に回答する。

(4) 調査内容：①背景的情報（名前、勤務校、教職歴、専攻、留学経験、研修歴など)、②日本の英語専門筆記試験（難度、出題量、良問、悪問、測定能力、授業実践に求められる力など)、③韓国中等学校英語教員任用選考競争試験（日本の場合と

ほぼ同様)、④日本の教員採用試験のあり方（統一テスト、試験内容の公開、改善方法、大学で学ぶべき英語関連科目など）で構成されている。

6　分析と考察

本稿の主眼は、優秀な教員を確保するために英語専門筆記試験でどのような力を測定するべきかという問題を追求することである。そのために、重要な５つの関連項目、①授業実践で求められる力、②日本の悪問・良問、③韓国の悪問・良問、④英語専門筆記試験の改善のあり方、⑤大学英語教員養成プログラムで学ぶべき科目を選んで、以下に分析・考察を行う。

(1)　授業実践で求められる能力

この項目の質問内容は次のとおりである。「授業を実践する上で教師に求められている能力とはどのようなものですか。質問21の12項目の中から上位５つ選んで、番号を回答欄（上位が１、下位が５に記入してください。)」選択項目は、①語彙力、②文法力、③英文読解力、④英文和訳力、⑤和文英訳力、⑥英作文力、⑦オーラルコミュニケーション力、⑧教授法などの英語教育に関する知識・理解、⑨教育課程（学習指導要領）に関する知識・理解、⑩英語学に関する知識・理解、⑪文化的背景知識や理解、⑫英米文学に関する知識・理解である。

図１は中高を総合して回答を集計し、１位を５点、５位を１点として各項目の平均をとったものである。この結果を見ると、上位から①英文読解力（3.7)、②オーラルコミュニケーション力（3.5)、③教授法などの英語教育に関する知識・理解（3.2)、④教育課程（学習指導要領）に関する知識・理解（3.1)、⑤文法力（3.0）という項目順になった。逆に、優先順位が低い順に見ると、①英米文学（1.0)、②和文英訳（2.1)、③英文和訳（2.2)、④文化的背景の知識や理解（2.4)、⑤英語学の知識・理解（2.6）となった。英語教員は、実践的コミュニケーション能力の育成の流れから、伝統的な訳読文法中心の授業に見られるような言語知識を単に再現する能力というより英語を使って何かできることを志向し、そのために総合的な英語力と同時に英語教育の専門知識も重要であると考えていることがわかる。

だが中高別に見ると若干差が明らかになる。図２が示すように、中学校ではオーラルコミュニケーション力、教授法等の英語教育に関する知識・理解、教育課程（学習指導要領）に関する知識・理解の順に３つの項目が重視される傾向にある。一方で、高校では英文読解力が他を圧倒的し、それにオーラルコミュニケーション力、英語学に関する知識・理解、教育課程（学習指導要領）に関する知識・理解と続く。この違いは中高現場では指導の重点の置き方が異なるためであると推察する。つまり、中学校では学習指導要領が求める実践的コミュニケーション能力育成への指導が確実に求められているのに対して、高校では、そのような方向性を理解しながらも、大学入試に現実的に対応するためにも英文読解中心の授業が展開されているためであろう。

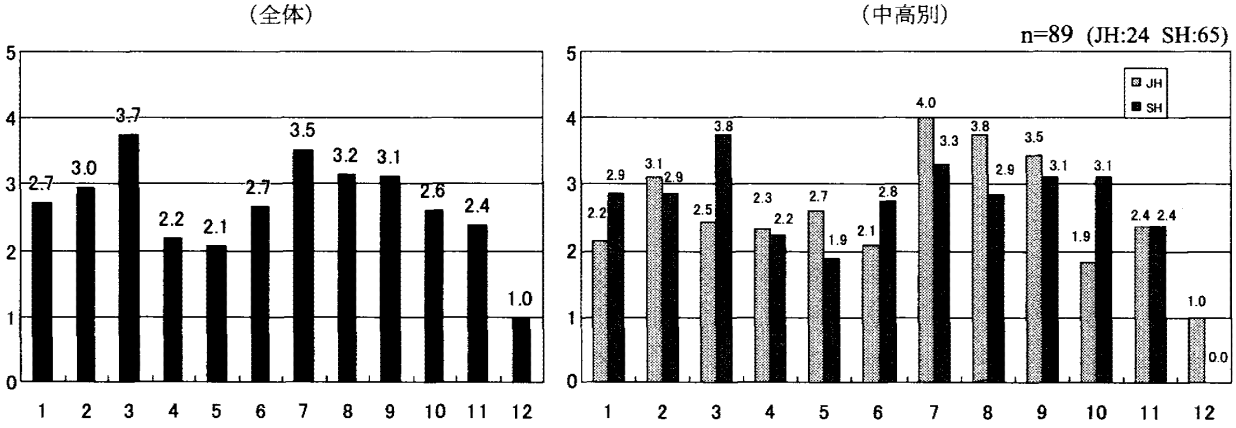
(2) 日本の良問・悪問

この項目では、まず日韓の英語専門筆記試験問題を解いて、次のような質問に回答することが求められている。「出題された問題の中で良問はどれですか。問題番号を回答欄に書き、その理由を説明してください（複数選択可、ただし３つまで)。」好ましくない質問についても同様である。表１はこの結果をまとめたものである。

良問としては、問９、問６（Appendix２参照、以下同様）が高く評価されている。回答者89人のうち41人（46%）が選んだ第１位の問９は、オーラルコミュニケーション能力育成の観点から、学年や教材などの具体的な条件設定に基づいてどのような言語活動を導入・展開するか、またその指導過程について記述する問題である。良問である理由としては「授業を構想する実践的指導力を評価する問題である」という点で皆が一致している。次に32人（36%）の教員が良問に選んだ問６は、“TPR”、“Audio-Lingual Method”、“affective filter”、“skimming”、“feedback”、“self-assessment”といった項目に関する英語の説明文を読んで語群から該当項目を選択する問題である。いずれも「授業実践において英語教員として理解していなければならない基本的な英語教育に関する知識」である。

これに対して多くの者が一致して悪問とした問題は特にない。だが、問１、問７、問８は注目しておく必要があるだろう。問１は18人（20%）の者が悪問に選んでいるが、同時に良問としても評価が低い。この理由は日本の大学入試問題に典型的な文法・語彙に関する多肢選択問題であるからである。悪問として選んだ理由として、「文脈から切り離された文法・語彙のみを扱うような問題は本当に問う必要があるのか」、「このような力は英語でのエッセイや内容要約など意味のある問題で測ることができる」、さらに興味深いことに「TOEFL等のテストで補完できる」というコメントさえある。敷衍すれば、一般的な英語力についてはTOEFLやTOEICなどのテストで補完し、教員採用試験ではもっと専門的な能力を問うべきであると解釈できよう。

図１　授業実践で求められる能力



※１ 語彙力、２ 文法力、３ 英文読解力、４ 英文和訳、５ 和文英訳、６ 英作文、７ オーラルコミュニケーション力、８ 教授法などの英語教育に関する知識・理解、９ 教育課程（学習指導要領）に関する知識・理解、10 英語学の知識・理解、11 文化的背景の知識・理解、12 英米文学

表1　日本の英語教員採用試験の良問・悪問　　n＝89

番号	解答	内　容	良問	悪問
1	J	文法・語彙（multiple-choice）	7（ 8%）	18（20%）
2	J	文法・語法（multiple-choice）	6（ 7%）	12（13%）
3	J	英語長文読解（multiple-choice）	4（ 5%）	9（10%）
4	J	英語長文読解（総合問題）	17（19%）	16（18%）
5	J	英語長文読解（総合問題）	20（23%）	8（ 9%）
6	J	英語教育指導法の知識（multiple-choice）	32（36%）	10（11%）
7	E&J	英語教育政策（アクションプランの和訳等）	18（20%）	18（20%）
8	J	英語指導法（CALLの活用法）	19（21%）	20（23%）
9	J	英語指導法（Oral communicationの指導）	41（46%）	12（13%）
		合　　計	164	123

※EとJは英語あるいは日本語での解答方法を表す。

問7は、近年教員採用試験でよく問われる教育課程や政府のアクションプランなどに関する知識理解と和文英訳を融合した問題である。だが、そもそもこのような問題は「典型的な和文英訳問題であり、自己表現がない」という点に加えて、「文部科学省の押しつけのような気がして、解答すること自体に意味を感じない。問題の意図はどこにあるのか。」このように冷めたコメントが聞かれる。実際、この種の問題は知識を再現する能力を問うレベルにとどまり、物事をよく考え、判断し、表現するといった高度な認知能力は必要とされない。

悪問として最も回答が多かった問8は、コンピュータ教室でのインターネットなどを活用した英語の授業を行う際の授業のねらいと活用方法を述べる問題である。multi-media の活用については、学習者の自律学習を促進するためにも今後一層活用を図る可能性があることは当然英語教員ならばよく認識していることである。だが、「確かに学習指導要領に書いてあるが、コンピュータ教室での英語授業は現実的でない」、「英語教員の資質・能力とはあまり関係がない」などのコメントのように、おそらく物理的にも時間的にも余裕がないことから、実際に学校で活用を図るには現実的でないと考えているのだろう。

(3) 韓国の良問・悪問

質問内容や回答手順については、上述の日本の教員採用試験に関する場合と全く同じである。

表2が示すように、韓国の試験の良問は問9と問7（Appendix 2参照、以下同様）である。それぞれ30人（34%）と26人（29%）の支持を得ている。最も高い評価をうけた問9は4肢選択の語彙力テストに関する問題である。そこではこの問題が良問だと言えない理由、つまり与えられた選択肢がなぜ不適切なのかを英語で説明することが求められている。4つの選択肢が与えられた文章から統語的に形容詞であるべきなので、解答がweakであることは一目瞭然である。通常ならば4つの選択肢を全て形容詞にして、文章の内容をよく考えて選択させることが理想である。「Testing は平常の指導に関わる実用的な問題である」というコメントにあるよ

表２　韓国の教員採用試験の良問・悪問　　n＝89

番号	解答	内　容	良問	悪門
1	E	一般英語（文脈からキーワードを類推）	3（ 3%）	9（10%）
2	K	一般英語（要旨のまとめ）	15（17%）	1（ 1%）
3	E	一般英語（重要な情報を把握し、対話文の空所を補充）	15（17%）	4（ 4%）
4	E	一般英語（文脈の把握し、与えられた一文の挿入）	3（ 3%）	3（ 3%）
5	E	一般英語（要点を把握し、適切な面接の質問を創造）	17（19%）	0（ 0%）
6	E	一般英語（概要を把握し、空所適語補充）	5（ 6%）	2（ 2%）
7	E	一般英語（要約文の作成）	26（29%）	1（ 1%）
8	E	英語教育（The Input Hypothesisの理解と空所補充）	1（ 1%）	9（10%）
9	E	英語教育（Testの作成に関わる問題を説明）	30（34%）	7（ 8%）
10	E	英語教育（教授法の理解：Content-based Instruction）	10（11%）	13（15%）
11	E	英語教育（コミュニケーション方略の理解、適語選択）	9（10%）	12（13%）
12	K	英語教育（Listening speedの問題を説明）	14（16%）	3（ 3%）
13	E	英語教育（談話能力の要素、適語選択）	6（ 7%）	5（ 6%）
14	K	英語教育(教師のフィードバックの類型､適語選択･定義説明)	10（11%）	7（ 8%）
15	K	英語学(音声学:アクセントの位置の違いと意味の違いを説明)	6（ 7%）	12（13%）
16	K	英語学（統語：thatの用法の相違点を説明）	5（ 6%）	10（11%）
17	E&K	英語学（語用論：発話の意図を説明）	14（16%）	4（ 4%）
18	K	英米文学（詩の解釈）	9（10%）	5（ 6%）
19	E	英米文学（要点を把握し、与えられた英文を完成）	8（ 9%）	2（ 2%）
合　計			206	109

※ＥとＫは英語あるいは韓国語での解答方法を表す。
※韓国の英語教員採用試験は４つのカテゴリーで出題される。

うに、現場の教員にとってテスト・評価は指導のあり方と表裏一体の関係にある重要な関心事である。実際、この種のTestingに関する問題は日本の試験にはなく、ほとんどの教員が大学で学んでいないので興味深く映ったのだろうと推測する。

さらに、この問題は英語で説明を求められるので「思考力、表現能力、説明能力が問われ、単なる知識では対処できない」と多くの教員が指摘する。表２が示すように、日本とは違って、韓国のほとんどの問題が英語を使って解答することを求められている。この点は日本の試験にとって重要な示唆となる。

問７は約150語の文章を読んで、英語で与えられた書き出しを使って要約文を完成させる問題である。ただし連続した４語以上の本文中の表現は使用できない。この問題は「読解力、要約力、語彙力、英作文力などの総合的な能力が求められており、認知的にも高度な力が必要である」がゆえに、日本の英語教員から高い評価を受けていると言えよう。

さらに、問３や問５も比較的高い評価を得ている。問３は広告を読んで広告内容に関する対話文の中の空所に適語を補充する問題である。問５は、面接時の望ましい質問の仕方に関する文章を読んだ後、筆者の意図を汲んで面接官として適切な質問を考える問題である。これらの

問題が評価されている理由は、実生活の中のauthenticな場面や状況の中で英語を使って何かをする応用能力が問われているからであると考える。

これに対して、韓国の悪問について言えば、全体の15%以上が支持をしなかった問題はない。これは日本の英語教員が韓国の試験を高く評価している証拠である。だが強いて言えば、問10、問11、問15、問16はあまり高い評価を受けていない。問10は簡単な教授法の説明と指導案例から“content-based instruction”という語を導き出す「教授法に関する知識のみを問う単純な問題である。」問11は与えられた会話文で使用しているコミュニケーション方略が何かを語群から選ぶ問題である。「専門的用語で、あまり問題として意味はない」というコメントに表現されているように、英語教員にとっては“approximation”、“circumlocution”、“code-switching”といった用語は専門的で染みが薄く、また知識のみを問う問題として評価しなかったのであろう。問15、問16は英語学に関する問題である。問15は“English Teacher”がアクセントの位置によって意味が異なることを説明する音声学の問題である。問16は同格と関係代名詞のthatの用法の違いを説明する文法の問題である。いずれも日本の英語教員にとって馴染み深い問題であることが悪い評価につながっていると推察する。

(4) 英語専門筆記試験の改善

日韓の英語専門筆記試験に関する質問の後、総括として日本の教員採用試験のあり方について尋ねた。

最初の質問は韓国のような統一テストを導入すべきかどうかという質問である。これに関して約70%の中高英語教員が賛成したのは興味深い事実である。次に、もし統一テストを実施するとすればどのような内容を盛り込むべきか具体的に記述するように求めた。表3は上位10項目を示したものである。当然のことながら、英語専門筆記試験においては「教授法等の専門知識」を問うべきだという意見が56%と他を圧倒し、それに「英語essay」、「OC能力」、「内容読解力」などの英語力に関する項目が後に続く。要するに、英語教員には英語を使用する能力が

表3　英語専門筆記試験の改善

n=50

順位	改善内容	人数
1	教授法等の専門知識	28（56%）
2	英語essay	11（22%）
3	OC能力	11（22%）
4	内容読解力	10（20%）
5	大意要約	7（14%）
6	文法力・語彙力	6（12%）
7	英語力	6（12%）
8	英語での要約	3（ 6%）
9	教育課程（学習指導要領）	2（ 4%）
10	異文化理解	1（ 2%）

前提であり、そして英語教育に関する専門知識は必須の能力であると解釈できる。日本の大学英語教員養成プログラムの現状は、韓国のように国の施策として専門的科目の充実が図られているわけではないので、日本の英語教員の多くは自分自身の専門知識不足を実感しているのだろう。

(5) 大学英語教員養成プログラムで学ぶべき科目

それでは、教員採用試験との一貫性を図る意味からも「今後大学の英語教員養成プログラム（英語の授業）でぜひ学んでおくべきこと、あるいは身につけておくべきことは何か」ということが問題となる。この質問に対して、現在大学（院）で教えられている23の英語教育関連科目のうち３つを選び、その理由を説明してもらった。なお、該当する選択肢がない場合は科目名を記述してもらうことにしたが、特に回答はなかった。以下の表４は23項目の結果である。

表４　大学英語教員養成プログラムで学ぶべき科目

n＝86

順位	科目	人数
1	外国語教授方法論	46（53%）
2	外国語授業実践研究	45（52%）
3	Public Speaking	26（30%）
4	Discussion & Debate	24（28%）
5	外国語教材分析・開発論	23（27%）
6	外国語能力測定・評価論	16（19%）
7	言語習得理論	15（17%）
8	外国語教育メディア論	12（14%）
9	英語学習文法論	6（ 7%）
10	Pronunciation Drill	6（ 7%）
11	口語英語研究	5（ 6%）
12	比較文化論	4（ 5%）
13	英語学概論	3（ 3%）
14	社会言語学	3（ 3%）
15	比較言語学	3（ 3%）
16	英語音声教育論	2（ 2%）
17	児童文学	2（ 2%）
18	英語史	1（ 1%）
19	心理言語学	1（ 1%）
20	文体論	1（ 1%）
21	英米文学概論	1（ 1%）
22	日英翻訳	1（ 1%）
23	現代英米文化論	0（ 0%）

まず「外国語教授方法論」、「外国語授業実践研究」の２科目がいずれも50％を超え、他の科目を圧倒する。次いで「Public Speaking」、「Discussion & Debate」のオーラルコミュニケーション関連２科目、そして「外国語教材分析・開発論」、「外国語能力測定・評価論」、「言語習得論」と続く。この結果から、現職の英語教員は実践的指導力、言い換えれば「授業力」の充実を強く求めていることが明白である。これは、上述の清水（2005）が行った調査で、学生時代に最も役立つ教員養成関係の授業は教授法などの実践的能力の養成であると新規採用英語教員が述べていることと一致する。ちなみに、現在の教壇に立つ英語教員は大学で英語教育を専攻した者が少なく、上述のような科目を学んでいない事情が結果に反映されているように思われる。

7　まとめ

本調査は、良質な教員採用試験の研究開発のためのパイロットスタディーとして実施したものであるので、サンプルの不十分さや中高校種間のサンプルの偏りに限界がある。また、国内外の英語教員の専門性に関する先行研究を十分精査し、確固とした研究の理論的枠組みが構築できているわけでもない。さらに、対象を中高現職英語教員に限らず、教育委員会英語採用試験担当者や英語教員志望者に変えて比較検討してみることも今後の課題である。だが、現職の中高英語教員を対象にして実証的研究を行うことは、優秀な英語教員に求められる能力を特定し、今後の英語教員養成・採用・研修の充実に活かすために大いに意義があると考える。

それでは、英語専門筆記試験でどのような力を測定するべきかという問いに答えるために、本稿で取り上げた関連調査項目の分析・考察の結果を以下に要約する。

① 授業実践で求められる能力については、中高で若干の違いはあるが、言語知識を単に再現する英文和訳、和文英訳のような力より、英文読解力、オーラルコミュニケーション力などの実践的英語力、及び教授法などの英語教育に関する専門的知識・理解が重要である。

② 英語専門筆記試験で求められる能力を専門的能力と英語力に分けて考えると、以下のような指摘ができる。

ａ．専門的能力としては、まず英語教員は「基本的な英語教育に関する知識」を理解していなければならない。次に、学年や教材などの具体的な状況の中でどのような言語活動を導入・展開するか、またその指導過程はどうかといった「授業を構想する実践的指導力」を測定することが重要である。そして、Testing のような「平常の指導において重要な能力」を測るべきである。その際、韓国の試験のように英語で説明を求められれば、思考力、表現能力、説明能力が問われ、単なる知識では対処できないので意味がある。

ｂ．一般的な英語力は、日本の大学入試に典型的な文法・語彙問題、英文和訳・和文英訳などの問題のように単なる知識の再現というより、むしろ韓国の試験のように、英文内容を読み、それに基づいて実際に場面や状況を想定しながら英語を使って何かをするとか、英語でエッセイを書いたり、内容要約をしたりするといった意味のある問題を通して測定すべきである。つまり、読解力、要約力、語彙力、英作文力などの「総合的能力をためす認知的にも高度な力」や「応用力」を評価するが望ましい。なお、試験時間や採点といった現行の採用試験制度が持つ多くの制約を考えると、英語力を測定するなら

ばTOEFLやTOEICなどのテストで補完してもよいのではないだろうか。

③ 英語専門筆記試験を改善するには、専門的能力、特に「教授法等の専門知識」を評価し、加えて英語運用能力も測るべきである。

④ 大学英語教員養成プログラムでは、「外国語教授方法論」、「外国語授業実践研究」、「外国語教材分析・開発論」、「外国語能力測定・評価論」などの科目を学び、実践的な指導力を養成するべきである。英語力については「Public Speaking」、「Discussion & Debate」で実践的なオーラルコミュニケーション能力を養成する。

以上から、現職英語教員は自らの職の専門性を強く意識していることが窺える。この専門性を高めるためには、英語力においては、知っている単なる知識・理解の再現ではなく、特定の場面や状況を想定しながら、英語を使って、よく考え、解釈をし、それに基づいて表現・創造する力といった認知的に高い応用能力が求められる。さらに、英語教育の専門家として必要とされる知識・理解とそれらをいろいろな授業の場面に応用できる力を身に付けることも必要である。

ところで、このような力を教員採用試験で評価するためには、筆記試験以外の多様な選考方法を導入し、多元的な選考尺度を用いるのが妥当である。英語教員にふさわしい資質・能力を測る手段としては、確かに筆記試験だけでは質的・量的に不十分であり、2次試験での模擬授業、個人（集団）面接などのあり方も重要な選考方法であることは否定できない。だが、そのような試験は主観的な部分が多く、明確な評価基準の設定、公平な評価を行うための評価者の訓練など多くの問題があることも事実である。

要するに1次・2次での各種試験は相互補完的な役割を果たす必要がある。すなわち、各試験でどのような能力をどの試験で測るのかが問題となる。特に1次試験で多くの受験者がふるいにかけられる現実を考慮すると、英語専門筆記試験が教員採用試験全体の中でどのような役割を果たすべきか明確にしなければならない。なぜなら、どれほど英語口頭運用能力があっても、どれほどうまく模擬授業を行う力があっても、1次試験に合格しなければ2次試験に進めないからである。

したがって、今後の英語教員採用試験のあり方として次のような改善を提言したい。英語教員の選考は現行のような2段階ではなく3段階で考える。つまり、一般英語力についてはTOEFLやTOEICなどを活用し、現在多くの都道府県（市）教育委員会がTOEFL・TOEIC・英検などを活用している英語特化基準[8]という方法ではなく、1次試験の前段階として一定の得点（例えばTOEFL550点、TOEIC730点）を英語専門筆記試験の足きり（あるいは加算点）として使用する。次に1次試験では、東京都教員採用試験合格者の指摘があったように、英語力に偏った現行のような試験ではなく、英語教員に求められる専門的能力を重視して実施する。そして、2次試験では英語力及び専門的能力の評価を補完するために実技中心の試験を行う。

最後に、本稿では、日韓の教員採用試験に対する現職英語教員の意識調査に基づいて、優秀な英語教員に求められる能力の minimum requirements を特定し、それを今まで採用側だけに任されていた教員採用試験問題の開発に活かそうと考えた。しかし、理想的な試験モデルを構築するためには、さらに深く掘り下げて英語教員の専門的力量を構成する要素をより一層明確にし、それらをどのような試験で測れるか検討することが今後の課題である。

※本稿は、2006年6月25日に第36回中部地区英語教育学会和歌山大会（於和歌山大学教育学部）のシ

ンポジウムにおいて、筆者が「英語教員に求められる能力とは何か―日韓英語教員採用試験に関する意識調査からの示唆―」と題して行った発表に加筆訂正したものである。

【注】

1） 本研究は、筆者が代表を務める平成18年度科学研究費補助金研究 （基盤研究（C）、課題番号18520465、研究テーマ：「良質な教員採用試験（英語専門筆記）の研究開発とその波及効果について」、共同研究者：龍谷大学国際文化学部松村省一准教授、二葉晃文教授）の一環として行ったものである。これまで、上記第36回中部地区英語教育学会和歌山大会での発表と併せて、第３回北京Asia TEFL大会（2005年11月）及び第14回ソウルKOTESOL大会（2006年10月）において、松村省一准教授と本調査に関わる研究発表を行ってきた。

2） 日本の英語専門筆記試験はたいてい１次試験で実施され、２次試験では英語実技試験である。しかし、１次と２次の両方で実施したり、教養試験と同一時間内で実施したりと、実施方法が異なる場合もある。

3） 英語教育に関する具体的な動きは、中央教育審議会の「外国語教育の改善」に関する答申（1996年）に端を発し、その後、新学習指導要領に示された「実践的コミュニケーション能力」の育成（1998年）、「21世紀日本の構想」懇談会による英語第２公用語論（1999年３月～2000年１月）、英語指導方法など改善の推進に関する懇談会（2000年１月～2001年１月）、英語教育改革に関する懇談会（2002年１～５月）、「英語が使える日本人」の育成のための戦略構想（2002年７月）、「英語が使える日本人」の育成のための行動計画（2003年３月）へと続く。

4） 韓国では1996年に政府教育部が師範大学に対して継続的段階モデルと総合的革新モデルを示し、実用的なコミュニケーション英語能力の育成のためにどちらかを選択するように指導助言を行い、大学養成プログラムは従来の英文学偏重カリキュラムから英語教育と英語スキル中心のカリキュラムに変わった（大谷他2004）。

5） これを踏まえて各都道府県（市）教育委員会の教員採用試験（英語）では、リスニングやインタビューやディベイト、TOEICやTOEFL試験の活用などさまざまな選考方法や選考尺度の改善・工夫がなされている。

6） 点数配分を公開している都道府県（市）教育委員会はまれである。愛媛県では、１次試験（教養、専門、論作文、面接、学業成績）の総合点1000点のうち、専門試験は中学校300点、高校400点となっている。なお、人物重視の観点から、面接も300点という高い配分になっている。

7） 日韓の英語専門筆記試験は2003年に実施されたものである。韓国の試験は全国型である。日本の試験は、全国の採用試験問題を概観して、語彙・語法、文法、英語長文総合問題、英作文、教育課程、指導法などの代表的な項目を含むことを条件に、京都府の採用試験を選んだ。

8） 全国の54都道府県（市）教育委員会採用試験のうち35試験で英語特化基準を設定している。だが、得点の扱いには、TOEFL550～600、TOEIC730～900と幅があり一貫性がない。またTOEFL・TOEIC得点間の相互互換性がない府県もある。さらに免除内容も一定でない。１次英語専門試験を免除とする場合が大多数であるが、一次試験（論文・面接・一般教養・教職教養試験全て）を免除する県も２県ある（脇田 2006）。

【参考文献】

伊藤弥香・神保尚武（2004）.「全国公立中・高の英語教員募集内容と採用の観点に関する調査」第１回JACET関東甲信越大会発表、於清泉女子大学。

大谷泰照、林桂子、相川真佐夫、東眞須美、沖原勝昭、河合忠仁、竹内慶子、武久文代（2004）.『世界の外国語教育政策：日本の外国語教育の再構築に向けて』東信堂。

河合忠仁（2004）.『韓国の英語教育政策』、関西大学出版部。

木村裕三（2001）.「韓国の初等学校における英語教育―実施５年目の現状とわが国への示唆①」『英語教育』４月号 pp.50-52.

笹島茂・大井恭子・古家貴雄・清水公男（2005）.「公立学校英語教員採用試験の現状と課題―採用試験は機能

しているか？—」第44回大学英語教育学会シンポジウム発表、於玉川大学。
佐野通夫（2005）.「韓国の教員養成」第41回日本比較教育学会大会発表、於日本大学。
JACET教育問題研究会［研究代表者：神保尚武］（2006）.「英語科教職課程における英語教授力の養成に関する実証的研究」平成17年度科学研究費補助金基盤研究（C）研究成果報告書。
高島英幸他（1999）.「韓国の小・中学校における英語教育—２年目の現状を４つの授業観察から検討する」『現代英語教育』１月号 pp.38-43。
東京アカデミー（2004）.『2005年度教員採用試験　本試験問題14 中・高英語』。
文部科学省（2006）. http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/12/yousei/index.htm
李明熙（2003）.「韓国の教育改革と教員養成制度」『教育課程』３月号、pp.64-67。
脇田博文（2006）.「英語教員に求められる能力とは何か—日韓英語教員採用試験に関する意識調査からの示唆—」第36回中部地区英語教育学会和歌山大会、於和歌山大学教育学部。
Alderson, J. C. & Hanps-Lyons, L. (1996). TOEFL preparation course: A study of washback. *Language Testing,* 13, 280-297.
Bartel, N. (2005). *Applied Lingustics ansd Language Teacher Education.* Springer.
Cho, Dongwan (2004). Use of Standardized Tests as University Graduation Requirement. *English Teaching*, 59, 1, 251-265.
Chapman, M. (2005). TOEIC: Claim and Counter-claim. *The Language Teacher,* 29, 12, 11-15. JALT.
Fouser, R.J. (2004). Public Teacher Employment Procedures and Examinations in Korea. JACET関西支部「海外の外国語教育研究会」１月例会発表、於大学コンソーシアム京都。
Freeman, D. & Richards, J.C. (1996). *Teacher Learning and in Language Teaching*. Cambridge University Press.
Hamp-Lyons, L. (1997). Washback, impact and validity;Ethical concerns. *Language Testing*, 12(3), 295-303.
Kam, H.W. & Wong, Ruth Y. L. (2004). English Education in South Korea. *English Language Teaching in East Asia Today: Changing Policies and Practice.* pp. 241-261. Eastern Universities Press.
Kam, H. W. & Wong, Ruth Y. L. (2004). *Language Policies and Language Education:The Impact in East Asian Countries in the Next Decade.* Eastern Universities Press.
Kim, Ee-gyeong & Han, You-kyung. (2002). *Attracting, developing and relating effective teachers: Background report for Korea.* Seoul: Korean Educational Development Institute.
Kwon, O. (2000). Korea's English education policy changes in the 1990s: Innovations to gear the nation for the 21st century. *English Teaching,* 55/1: 47-91.
Messick, S. (1996). Validity and washback in language testing. *Language Testing,* 13, 241-256.
Oi, K. & Sasajima, S. (2004). *Comparison of Teacher Employment Exams between Japan and Korea*. Paper presented at the 2nd Asia TEFL International Conference, Seoul Olympic Parktel, Seoul.
Shohamy, E. (1993). *The power of tests: The impact of language tests on teaching and learning.* Washington D.C.: The national foreign language center.
The Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology (2006). Looking for attractive teachers. Available: *http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/miryoku/03072301.htm.*
Tsui, Amy B. M. (2003). *Understanding Expertise in Teaching: Case Studies of ESL Teachers.* Cambridge University Press.
Wakita, H. & Matsumura, S. (2005). Validating the Employment Examinations for Japanese Secondary School Teachers of English. The 3rd Asia TEFL International Conference in Beijing, November 5th.
Wakita, H. & Matsumura, S. (2006). What are the qualities of "quality" EFL teachers? The 14th Annual KOTESOL International Conference in Seoul, October 28th.

【Appendix 1】

日本の中学校・高等学校教員採用試験（英語筆記）の妥当性及び波及効果に関するアンケート調査

日本の教員採用試験（英語）は、原則として、まず一次で学力試験（主に教職教養・一般教養・専門科目試験）が実施され、そこではある一定の基準に達しているかどうかが合否の判断基準になります。そのうえで、個人・集団面接、集団討議、小論文、模擬授業等による人物評価を重視した二次試験が実施され、最終採用候補者の選考がなされます。

この調査は、韓国の中等学校教員任用選考競争試験との比較に立って、日本の中学校・高等学校教員採用試験（英語筆記）の妥当性及び波及効果について検証することを目的とします。つきましては先生方のご意見・ご感想をお聞きしたいと思いますので、よろしくご協力をお願いいたします。

■ 背景情報について

ご回答していただく先生ご自身の背景情報についてお聞きします。失礼とは存じますが、クロス集計等を行う上で重要な情報となりますので、ぜひお応えくださいますようお願いいたします。

背景情報についての質問（通し番号1-12）および回答スペースは別添の冊子にあります。回答方法には記述と選択の両方がありますので、選択肢の場合は回答欄に該当番号をご記入ください。「その他」あるいは自由記述の場合はその内容を記述してください。

■ 日本の教員採用試験について

別添の試験問題には中学校用と高校用があります。ご所属の校種に基づいてまず問題を解答していただき、以下の質問（通し番号13-23）にお答えください。5段階の尺度で回答が求められている場合は、該当する番号を選び、回答欄にご記入ください。

13 日本の教員採用試験は難しいと思いますか。
①とても簡単　②簡単　③普通　④難しい　⑤とても難しい

14 質問13で④、⑤を回答された場合は、どのような点が難しいと思いますか。項目を整理して説明してください。

日本の教員採用試験の特徴についてお聞きします。

15 出題分量は適当ですか。
①とても少ない　②少ない　③適量　④多い　⑤とても多い

16 質問15で①、②を回答された場合はその理由を説明してください。

17 出題内容についてはどのように思われますか。

18 出題された問題の中で良問はどれですか。問題番号を回答欄に書き、その理由を説明してください（複数選択可、ただし3つまで）。

19 出題された問題の中で好ましくない問題はどれですか。問題番号を回答欄に書き、その理由を説明してください（複数選択可、ただし3つまで）。

20 その他、お気づきになった特徴があればどんなことでもお書きください。

21 この試験は次の12項目に示された能力を測るのにどの程度有効だと思いますか。項目ごとに5段階の尺度で回答してください。
①まったく有効でない　②有効でない　③どちらともいえない　④有効
⑤とても有効

1）語彙力　2）文法力　3）内容読解力　4）英文和訳力　5）和文英訳力　6）英作文力　7）オーラルコミュニケーション力　8）教授法等の英語教育に関する知識・理解　9）教育課程（学習指導要領）に関する知識・理解　10）英語学に関する知識・理解　11）文化的背景知識や理解　12）英米文学に関する知識・理解

22　質問21にある12項目以外に測定されうる能力があれば、内容を回答欄の⑬、⑭に記し、５段階の尺度で該当する番号を記入してください。

23　授業を実践する上で教師に求められている能力とはどのようなものですか。質問21の12項目の中から上位５つを選び、番号を回答欄（上位が１、下位が５）に記入してください。

■ 韓国中等学校英語教員任用選考競争試験について

まず背景的知識を得るために、別添の韓国教員採用試験の概要についてご一読ください。その上で韓国の採用試験の問題を解いていただき、以下の質問（通し番号24-35）にお答えください。

24　韓国の教員採用試験は難しいと思いますか。

①とても簡単　②簡単　③普通　④難しい　⑤とても難しい

25　質問24で④、⑤を回答された場合は、どのような点が難しいと思うのか項目を整理して説明してください。

韓国の教員採用試験の特徴についてお聞きします。

26　出題分量は適当ですか。

①とても少ない　②少ない　③適量　④多い　⑤とても多い

27　質問26で①、②を回答された場合はその理由を説明してください。

28　出題内容についてはどのように思われますか。

29　出題された問題の中で良問はどれですか。問題番号を回答欄に書き、その理由を説明してください（複数選択可、ただし３つまで）。

30　出題された問題の中で好ましくない問題はどれですか。問題番号を回答欄に書き、その理由を説明してください（複数選択可、ただし３つまで）。

31　その他、お気づきになった特徴があればどんなことでもお書きください。

32　この試験は次の12項目に示された能力を測るのにどの程度有効だと思いますか。項目ごとに５段階の尺度で回答してください。

①まったく有効でない　②有効でない　③どちらともいえない　④有効

⑤とても有効

１）語彙力　２）文法力　３）内容読解力　４）英文韓訳力　５）韓文英訳力　６）英作文力　７）オーラルコミュニケーション力　８）教授法等の英語教育に関する知識・理解　９）教育課程（学習指導要領）に関する知識・理解　10）英語学に関する知識・理解　11）文化的背景知識や理解　12）英米文学に関する知識・理解

33　質問32にある12項目以外に測定されうる能力があれば内容を記し、５段階の尺度で該当する番号を記入してください。

34　もし韓国で実施されている教員採用試験が日本に導入されるとすれば、先生ご自身の試験対策や準備はどのように変わりますか。

35　もし韓国で実施されている教員採用試験が日本に導入されるとすれば、大学での英語教員養成プログラム（英語に関する授業）はどのように変えるべきだと思いますか。

注）新免許法が2000年に実施されて教職関連科目が大幅に増加し、教科に関する科目（英語学・英米文学・英語コミュニケーション・異文化理解の４つのカテゴリーにつき最低１単位以上）の比重は40単位から20単位へと半分にまで減少した。

■ 日本の教員採用試験のあり方について

最後に、これまでの質問の総括として、今後の日本の教員採用試験のあり方を考えるために、以下の質問（通し番号36-48）についてお聞きします。先生の忌憚のないご意見をお聞かせください。

36　韓国で実施されているような教員採用試験を日本に導入することが望ましいと思いますか。

①思う　②思わない

37　質問36の回答の理由を説明してください。

38　日本の教員採用試験は各都道府県レベルで実施されていますが、その内容については必ずしも一貫していません。ついては韓国のように全国統一テストを実施するか、もしくは統一モデルが示されるべきだと思いますか。

①思う　②思わない

39　質問38の回答の理由を説明してください。

40　質問38で①を選ばれた先生にお尋ねします。統一テストを実施するならば、どのような内容を盛り込むべきだとお考えですか。項目を整理してお答えください。

日本の教員採用試験の公開性あるいは公正さについてお聞きします。

41　教員採用試験の試験問題は完全に公開されるべきだと思いますか。

①思う　②思わない

42　質問41の回答の理由を説明してください。

43　教員採用試験の採点基準や配点は明示されるべきだと思いますか。

①思う　②思わない

44　質問43の回答の理由を説明してください。

45　教員採用試験の結果は、合否判定だけでなく、セクションごとの点数などの詳細情報を加えて受験者本人に通知されるべきだと思いますか。

①思う　②思わない

46　質問45の回答の理由を説明してください。

47　優秀な指導力ある英語教員を採用するために、日本の教員採用試験がどのように改善されるべきか、先生の考えをお聞かせください。なお、ここでは専門筆記試験に限らず、リスニング試験や英語での面接・集団討論、英語での小論文、模擬授業、多様な試験内容を念頭において自由に書いていただいて結構です。

48　今後大学の英語教員養成プログラム（英語の授業）でぜひ学んでおくべきこと、あるいは身につけておくべきことは何だと思いますか。次の選択肢より３つ選び回答欄にその番号を書いてください。また、その理由をお聞かせください。もし該当する選択肢がない場合は、先生のご意見を記述してください。

１）外国語教授方法論　２）外国語能力測定・評価論　３）外国語教育教材分析・開発論　４）外国語教育メディア論（視聴覚機器・ＣＭＩ）　５）外国語授業実践研究　６）英語音声教育論　７）英語学概論　８）英語史　９）英語学習文法論　10）社会言語学　11）比較言語学　12）心理言語学　13）文体論　14）言語習得理論　15）英米文学概論　16）口語英語研究　17）児童英米文学講読　18）Pronunciation Drill　19）Public Speaking　20）Discussion & Debate　21）日英翻訳　22）現代英米文化論　23）比較文化論

【Appendix 2】

日本の良問

6　外国語教育に関連した次の(1)～(6)の各文の（　　）に入る最も適切な語句をア～スから一つずつ選び，記号で答えなさい。

(1) In (　　) students can practice language together, study a text, research language or take part in information-gap activities. They can write dialogues, predict the content of reading texts, or compare notes on what they have listened to or seen.

(2) (　　) encompasses not only correcting students, but also offering them an assessment of how well they have done, whether during a drill or after a longer language production exercise. The way we assess and correct students will depend not only upon the kind of mistakes being made and the reasons for them, but also on the type of activity the students are taking part in.

(3) We need to decide whether a particular activity in the classroom is designed to expect the students' complete (　　) — as in the study of a piece of grammar, a pronunciation exercise, or some vocabulary work for example — or whether we are asking the students to use the language as fluently as possible. We need to make a clear difference between 'non-communicative' and 'communicative' activities; whereas the former are generally intended to ensure correctness, the latter are designed to improve language fluency.

(4) Although, as teachers, we are ideally placed to provide accurate assessments of student performance, students can also be extremely effective at monitoring and judging their own language production. They frequently have a very clear idea of how well they are doing or have done, and if we help them to develop this awareness, we may greatly enhance learning. Student (　　) is bound up with the whole matter of learner autonomy.

(5) A critical aspect in the prevention of problem behavior is the (　　) we have with our students. This can be greatly enhanced by making sure that we listen to what they say with interest, and that we look at them when we talk to them; we need to ensure that we do not only respond to the students at the front — or the more extrovert ones — but that we try and work with all of the people in our class.

(6) A term commonly used in discussions about reading is (　　) (which means running your eyes over a text to get a quick idea of the gist of a text). By encouraging students to have a quick look at the text before plunging into it for detail, we help them to get a general understanding of what it is all about. This will help them when and if they read for more specific information.

ア．feedback	イ．pair work	ウ．fluency	エ．syllabus
オ．schemata	カ．TPR	キ．self-assessment	
ク．affective filter		ケ．Audio-lingual Method	
コ．accuracy	サ．skimming	シ．scanning	ス．rapport

9　A先生は，2年生の授業で，生徒がお互いを知るために，級友に質問したいことについて英語で文を作成し，それを質問し合い，その答えをもとに相互に紹介し合う活動をさせようとした。このとき，下の各問いに日本語で答えなさい。

(1) あなたならこの活動をどのように展開するか，指導過程を箇条書きで述べなさい。

(2) 英語による発話を生徒に促すためには，授業の計画及び実施の段階で一般的にどのようなことに留意したらよいか。箇条書きで5点述べなさい。

日本の悪問

1　次の(1)～(10)の英文の（　　）に入る最も適切な語句をそれぞれア～オから一つ選び，記号で答えなさい。

(1) It is very (　　) of you to advise her to call her superior right away.
ア．sensible　イ．sensitive　ウ．sensual
エ．sentient　オ．senseless

(2) A law has just been approved that (　　) smoking in public places for the benefit of non-smokers.
ア．bans　イ．bears　ウ．buries　エ．begins　オ．bad

(3) As she was free yesterday afternoon, Kate spent time (　　) around the secondhand bookstore.
ア．booming　イ．browsing　ウ．breeding
エ．brushing　オ．brewing

(4) To (　　) the hours that Japanese children watch television, parents should persuade their children to read a book or play outdoors.
ア．regress　イ．recur　ウ．recede　エ．retreat　オ．reduce

(5) Finally, Robert (　　) at the decision to marry her.
ア．came　イ．reached　ウ．went　エ．arrived　オ．took

(6) Researchers at this university have developed a vaccine that will become the first (　　) safeguard against the disease.
ア．successful　イ．successive　ウ．succeeding
エ．successor　オ．substitutive

(7) (　　) we take the Shinkansen which leaves Kyoto Station at one, we should be able to attend the meeting in Tokyo.
ア．As soon as　イ．As long as　ウ．As well as
エ．As many as　オ．As much as

(8) If she had had time, she (　　) the report.
ア．finishes　イ．could finish　ウ．could have finished
エ．can finish　オ．finished

(9) I was so busy preparing for the test today that I (　　) time to talk with my friends.
ア．could have　イ．had hardly　ウ．never have
エ．had hard　オ．hardly had

(10) I (　　) not do a thing at all than do it badly.
ア．would better　イ．would like to　ウ．would more
エ．would well　オ．would rather

7　次の文は，平成14年7月に文部科学省から発表された「英語力・国語力増進プラン」の一部である。これについて，各問いに答えなさい。

経済・社会等のグローバル化が進展する中，①子ども達が21世紀を生き抜くためには，国際的共通語となっている「英語」のコミュニケーション能力を身に付けることが必要であり，このことは，子ども達の将来のためにも，我が国の一層の発展のためにも非常に重要な課題となっている。

その一方，現状では，②日本人の多くが，英語力が十分でないために，外国人との交流において制限を受けたり，適切な評価が得られないといった事態も生じている。③同時に，しっかりした国語力に基づき，自らの意見を表現する能力も十分とは言えない。

このため，日本人に対する英語教育を抜本的に改善する目的で，具体的なアクションプランとして「『　④　』の育成のための戦略構想」を作成することとした。あわせて，国語力の涵養も図ることとした。

(1) 下線部①，②，③を英語に訳しなさい。

(2) 『　④　』に入る適切な日本語を書きなさい。

8　中学校学習指導要領では，「各教科等の指導に当たっては，生徒がコンピュータや情報通信ネットワークなどの情報手段を積極的に活用できるようにするための学習活動の充実に努めるとともに，視聴覚教材や教育機器などの教材・教具の適切な活用を図ること。」と示されている。コンピュータ教室における英語の授業で，生徒がインターネット等を活用した学習を行う場合，どのような活用方法が考えられるか，一例を示しなさい。授業のねらいと具体的な活用例に分けて簡潔に日本語で書きなさい。

韓国の良問

7. 다음 글을 읽고, 주어진 단어로 시작되는 요약문을 영어로 완성하시오. 단, 연속된 4단어 이상의 본문 표현을 그대로 옮겨 쓰지 마시오. [5점]

If human beings paid attention to all the sights, sounds, and smells that besiege them, their ability to codify and recall information would be swamped. Instead, they simplify the information by grouping it into broad verbal categories. For example, human eyes have the extraordinary power to discriminate some ten million colors, but the English language reduces these to no more than four thousand color words, of which only eleven basic terms are commonly used. That is why a driver stops at all traffic lights whose color he categorizes as *red*, even though the lights vary slightly from one to another in their hues of redness. Categorization allows people to respond to their environment in a way that has great survival value. If they hear a high-pitched sound, they do not enumerate the long list of possible causes of such sounds : a human cry of fear, a scream for help, a policeman's whistle, and so on. Instead they become alert because they have categorized high-pitched sounds as indicators of possible danger.

Human beings _____

_____

_____

9. 다음은 좋은 어휘력 평가 문항이라고 볼 수 없다. 그 이유를 영어로 쓰시오. [2점]

On the way home today, I had to help the _____ woman up the stairs.

ⓐ happily　ⓑ weak　ⓒ climb　ⓓ health

_____

_____

10. 다음 설명과 수업지도안의 예는 어떤 교수법에 대한 것인지 영어로 쓰시오. [3점]

> It is one of the integrated approaches which encourage the teaching of all four skills within the general framework of using language for learning as well as for communication. It integrates the learning of some specific subject-matter content with the learning of a second or foreign language.

Procedures :	**Notes** :
Talk about 'the globe'	whole class
Practice words related to the globe	
Watch a video titled 'Understanding Globes'	pair work
Read a chapter in the textbook	
– discuss the content of the chapter	
– answer problem-solving questions	
Describe latitude and longitude co-ordinates	group work
– find the cities on the globe	with handout
Assignments : reading about 'Earth'	

11. 다음 각 대화문을 읽고, Minsu와 Mina가 사용하는 의사소통 전략 2가지를 보기에서 골라 차례대로 쓰시오. [2점]

(1) 

Minsu : Miriam, can I borrow your ...?
Miriam : My what?
Minsu : **A counting-machine.**
Miriam : I see. You mean the calculator, don't you?

(2) 

Mina : Steve, I need your ... uh ...
Steve : What do you need?
Mina : **It's uh ... something you use when you want to clean things.**
Steve : I got it. You need a vacuum cleaner.

code-switching,	avoidance,	circumlocution,
approximation,	foreignizing	

(1) Minsu : _____

(2) Mina : _____

15. 다음 대화 (1)과 (2)의 'English teacher'는 의미가 다르다. 그 이유를 영어 강세와 연관지어 우리말로 쓰시오. [4점]

> (1) A : Do you like the English teacher?
> B : Yes, I do. He's French, but he teaches English so well.
> (2) A : Do you like the English teacher?
> B : Yes, I do. He's a typical Englishman. But interestingly, he teaches Spanish, not English.

_____

_____

16. 다음 (1)과 (2)의 구조적 차이점을 2가지만 우리말로 쓰시오. [5점]

> (1) a. the claim that the proof was false
> b. the claim that John is a genius
> (2) a. the claim that John has made
> b. the claim that John found upsetting

(1) _____

_____

(2) _____

_____